

# クリシュナ神のお月見

イーシャ・サーデサイによる再話

それは遅い夕暮れのことでした。ゴークル村の空はインクのように濃い藍色になりつつあり、絹の覆いを天上に引いたようでした。星々が、このカーテンの後ろから顔を出していました。あちらこちらで、そのキラキラと輝く星々を見ることができました。空気はジャスミンのように香っていました。

村のある家の中で、一人の若い母親が座って、部屋を跳ね回っているよちよち歩きの息子を見していました。

「クリシュナ」と、彼の母親のヤショーダは言いました。息子を見て頭を少し傾け、優しい目をしていました。「何をしているの？」

クリシュナは、一つの大きな素焼きのつぼの中をのぞき込んでいました。彼の母親がバターを作るのに使っていたものの一つです。そこには何も面白いものは見つからなかったもので、小さな木製のフルートが置いてある近くのテーブルの所に歩いて行きました。彼はフルートを取り上げると、ちょっとした間確かめて、再び置きました。彼は部屋の中をぐるりと見回しました。

「どうしたの、クリシュナ？」と、ヤショーダは尋ねました。

「遊びたい」と、彼は言いました。「でも、何で遊ぼうかな？」

「そうね」と、ヤショーダは言って、立ち上がりました。「そこの中の一つはどうかしらね？」 彼女は、いろいろな形、色、大きさのおもちゃが入っている、そばの戸棚の扉を開けました。

「ふーん」。クリシュナはそれらを見ながら言いました。彼は、唇をかみました。

「ここで待っていなさい」と、ヤショーダは言いました。「何か見つかるか、向こうの部屋に行ってみてきますから」

ヤショーダが探しに行ってしまうと、クリシュナは部屋の中の物を何でも調べながら、物をつまみ上げては下ろしたりして、よちよちと歩き続けました。彼がそれ——涼しく良い香りのするそよ風——を肌を感じた時、彼はカーペットをいじくり回し、その房の付いた端で遊ぶのに忙しくしていました。

彼は開いている窓を見上げました。そよ風は、ヤショーダがその前に留めていた薄布にさざ波を作っていました。彼は少しずつ近づきました。

「クリシュナ！」その時、彼の母親の歌うような声が向こうの部屋から聞こえてきました。「これを見てごらんなさい！」

ヤショーダが戸口に現れました。彼女の両手には、幾つかのロープや布、その他いろいろと、クリシュナが遊ぶことのできる物を持っていました。

だがしかし、部屋は空っぽでした！ ヤショーダは戸惑いながら見回し、眉間にかすかなしわを寄せました。息子は今度は、どこに行ったというのでしょうか？

すると、カーテンの後ろに、確かに誰かの輪郭が見えました。彼の小さな両脚が薄い白い布の下からのぞいていました。ヤショーダはほほ笑んで窓に歩み寄りました。カーテンを引き寄せて、話そうと口を開けようとして、急に、彼女は思いとどまりました。

というのは、そこには月を見上げている息子、外を眺めているクリシュナがいたのです。彼の顔の造作の一つ一つは柔らかさにあふれ、その柔らかさはあまりにも愛らしく、この世のものとは思えないほどでした。彼の瞳は澄んで明るく輝き、熱い思いにあふれていました。

彼はその同じ大きな瞳で、母親の方を向きました。何も言わず、彼は天を指さしました。そしてそこに、藍色を背景にさえざえと輝き渡っていたのは、月でした。それは満月でバラ色がかかった白色で、その表面では星座がきらめき、まるで繊細なダイヤモンド細工のようでした。

「お願い」と、クリシュナは言いました。「僕は月と遊びたい」

「月？」と、ヤショーダが聞きました。

「そう。月」と、クリシュナは言いました。「ここへ持ってきて」

「月をここへ持ってくるができるか分からないわ、クリシュナ」と、彼の母親は優しく言いました。

「でも——でも一緒に遊びたい」。クリシュナの声にはとても無邪気で純粋な思慕があり、ヤショーダは心がある場所で溶けていくのが感じられました。

「そうしたいのは分かりますよ」と、彼女は言いました。「でも月はずっと上の空にあるでしょう。そして私たちはここ、家の中にいるの」

「どうして月は僕たちと一緒にここにいられないの？ この家の中に」

「うーん、そうね。家から見ることはできるでしょう？」

クリシュナは窓の外をもう一度見詰めました。彼の唇が震え始めました。

「おかあさん！」と、彼は言いました。今、彼の目の縁には涙がたまっていました。「お願い——どうか、お願い——月と遊びたい。月と遊ばないといけないの。ここに持ってきて」

ヤショーダは、クリシュナの巻き毛を耳に掛けました。

「持っているおもちゃではどうなの？ 月ではないけど、それで遊ぶのも楽しいかもしれませんよ」

「いやだ。月と遊びたい」

そして、クリシュナは泣きじゃくりだし、涙がぼろぼろと頬を伝い落ちました。再び月に顔を向けました。彼の悲しげな泣き声は、夜のしじまに響き渡りました。

ヤショーダは必死になって解決策を探していました。息子が泣く様子に、彼女は自分の心が痛むのを感じました。どうしたら彼を慰められるのでしょうか。どうしたら彼に月を届けられるのでしょうか。

そのような疑問を自分に問い掛けていた時、ヤショーダは部屋の反対側に、光沢のある金属の物があるのを目の端に捉えました。それは彼女のサリーの端を映していました。彼女はそれをよく見るために、腰を掛けていた窓枠から立ち上がりました。

その金属は、実際には金属製の水盤でした。それは浅くて丸く、銀のようにきらりと光りました。それを見た時に、ヤショーダの顔に笑みが広がりました。彼女はそれを取り上げ、台所に持って行きました。

少しして彼女は再び現れ、窓のそばで立ったまま泣き続けている息子の所に、そっと歩いて行きました。

「クリシュナ」と、彼女は言いました。「ごらんなさい。あなたに持ってきましたよ」

突然すすり泣きが止まりました。クリシュナは母の方を向き、手の甲で顔を拭きました。

「ほら」と、ヤショーダは言いました。「お月様ですよ」

彼女は手に乗せた水盤を差し出しました。彼女は、それに水をいっぱいに満たしてきたのです。そして、水面は完全に静止して、穏やかでした。水盤の真ん中に、鮮やかに映っているのは月でした。

クリシュナは不思議そうに、この月を見ました。彼は水の中に1本の指を差し入れ、それからもう1本の指を入れました。すると月は波紋でぼやけ、それから再びまとまりました。クリシュナはくすくすと笑い、そして、手のひらの中に入れました。

ヤシヨーダは遊んでいる彼を見ていました。外には月があつて、光が中に差し込んでいました。家の中にも月があつて、水を通して輝いていました。そして、そこには双方の輝きに囲まれた息子がいました。あるいは、彼は自分自身の輝きに囲まれていたのかもしれませんが。それを見分けるのは難しいことでした。

本当にたくさんの光がある、と、ヤシヨーダは思いました。



© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。